

2024年12月23日

Library of the Year 2024 選考委員長コメント

NPO 法人知的資源イニシアティブ (IRI) 理事
Library of the Year 2024 選考委員長
岡野 裕行

通算で19回目となる Library of the Year 2024 は、2024年11月7日(木)の最終選考会をもって無事に終えることができました。選考基準に「他の図書館等にとって参考になる優れた活動」「独創的で意欲的に取り組んでいる具体的な活動事例」を表彰すると示した通り、それらの特徴を体現した図書館または図書館的活動として選ばれた8活動の関係者のみなさまには、心よりお祝いの言葉を申し上げます。

毎年の Library of the Year の運営は、第一次選考会と第二次選考会における議論を担当していただく選考委員となる候補者を決定し、依頼をかけるところから始まります。今年度は男性8名、女性11名、あわせて19名の選考委員(昨年度からの継続者も含む)の方々に関わっていただきました。図書館の館種の違いや特色ある図書館的活動にも広く目を配れるように、地域別、分野別、世代別、ジェンダーバランスなどの条件を考慮して、さまざまな分野の専門家にお声がけをしました。Library of the Year のコンセプトにある「良い図書館を良いと言う」の理念を念頭に置きながら、選考委員がそれぞれの観点を持ち寄り、「良い」という言葉に到達できるように全員で議論を積み重ねていただきました。

■候補活動の募集

今年度の選考過程では、2024年6月20日(木)から7月17日(水)までの期間に公式ウェブサイトで開催していた一般公募活動と、Library of the Year 2024 の選考委員による推薦活動とをあわせた全29活動が選考の対象となりました。候補活動の推薦時における昨年度からの変更点として、推薦文に記述できる文字数に上限を設定することで、それぞれの一推しのポイント(突き抜けていると評価できる取り組み)がより明確になるようにしました。昨年度までは文字数に上限を設けていなかったため、「あれもこれもいろいろなことに取り組んでいる」というように、選考委員が書類を確認する際に評価のポイントが絞りづらい推薦文も散見されておりました。それぞれにたくさんの言葉を費やして労力をかけて推薦文を記述していただいたと思うのですが、結果的にその活動の「良い」と思えるポイントが選考委員に伝わりづらいものになるケースが出てしまったことへの反省があったため、そのような点を今年度には修正したものといたします。

選考委員は「良い図書館を良いと言う」の理念に沿って、「ほかの活動と比べて何が突き抜けているのか」というように、抜きん出て優れた取り組み(言い換えれば「一点突破」の力

を持っているか) を評価しようとしています。文字数に上限があれば、推薦の際にも一押しポイントのみの記述に絞らざるを得ないだろうと考えました。推薦文の文字数に上限を設定するという変更を行ったことで、それぞれの活動の特徴がより簡潔に浮かび上がるようになったように思います。

■第一次選考会

すべての応募情報を取りまとめた上で、そこから書類審査による第一次選考会を7月23日(火)から8月10日(土)にかけて実施しました。第一次選考会では選考委員が時間をかけてそれぞれの活動の推薦文を読み込み、各自の価値観や評価基準にもとづいて100点満点で評価します。選考委員は一人につき最大で10活動まで点数を評価表に入力します。点数を付与する活動の数は選考委員によって異なっており、もっとも少ない人で5活動、多い人は上限となる10活動を選んでいきます。それら全員分の点数を合計して一覧表にまとめ、獲得した得点順にすべての活動を並び替えます。

その後、獲得した得点の上位から順番に第二次選考会へ進む活動を選び出していきます。オンライン会議による第二次選考会での議論に費やすことが可能な時間(2時間程度)を考えて、第一次選考会では例年12~14程度の活動を選ぶようにしています。得点の上位から数えてボーダーラインを引いてみると、今年度は13位と14位がわずかに1点差で並んでおり、14位と15位との差が開いていたことから、第一次選考会では14位までの活動を通してのこととしました。

■第二次選考会

第二次選考会は2024年9月2日(月)の19:00からZoomを用いたオンライン会議にて行いました。例年通りに希望者には会議の様子を公開するという方針にしましたので、事前にお申込みをいただいた45名のみなさまには、当日の様子を傍聴していただくことになりました。ただし、第二次選考会において発言権があるのは選考委員のみであり、傍聴者は議論の様子を見聞きするだけ(Zoomのチャット機能も使用不可)という条件で参加をお願いしています。

第二次選考会では1活動につき5分間を目処に議論をしていきます。それぞれの冒頭に推薦者から1分程度のプレゼンをいただいた後に、残りの4分程度のなかで選考委員が相互に意見を出し合って当該活動の「良い」と思われる点を言語化し、全員に共有していきます。このやり取りを14活動のすべてについて、五十音順で繰り返します。1活動につき5分間という時間配分は短いように思われるかもしれませんが、これを14活動について繰り返すこととなりますので、少なくともそれだけで70分間はかかることとなります。実際にはそれぞれに10数秒程度の超過時間も出てきますし、会議進行上の司会のコメントもございますので、予定の70分間には取まらずに75分程度くらいの時間がかかってしまいます。

前半の議論を終えると、即座に選考委員全員による投票を行っていただきます。選考委員の

みなさまにはあらかじめ配布してあるエクセルの評価表に、優秀賞にふさわしいと思える 3 活動に○印を、優秀賞に相当する活動なかでも特に大賞にふさわしいと思える 1 活動に◎印を、ライブラリアンシップ賞にふさわしいと思える 2 活動に●記号を、合計で 6 活動に票を投じてもらいます。それらの投票用紙の集約をすみやかに行った上で、全得票数の集計結果を一覧表にまとめたものを選考委員に示します（集計結果の一覧表については傍聴者には開示しておりません）。そこから後半の議論を再開し、今年度のライブラリアンシップ賞を 2 活動、優秀賞を 4 活動、合計 6 活動を選出することになります。票が集中したことですみやかに授賞を確定できる活動もありますが、授与できる数は二つの賞をあわせて 6 活動に限られますので、最後の 1 活動をどこにするのかは毎年のように議論が難航するところです。

すべての選考委員が納得できる結果になるまで話し合いを続けることは手間がかかる部分でもあります。選ぶ側にいることの責任も感じますので、どこを選ぶのか（あるいはどこを選ばないのか）を短い時間のなかでうまく言葉にしなければなりません。二つの賞の趣旨はそれぞれに異なりますので、「この活動は優秀賞よりもライブラリアンシップ賞のほうがふさわしいのではないか」といった調整も議論のなかで行われますし、「この活動は今年のうち授賞という形ではなく、もう少し様子を見ておきたい」「今年のほかの活動との兼ね合いで授与できないが、1年後には再び推薦されるくらいのすばらしい活動をしていると思われる」などの意見も飛び交います。

さらに第二次選考会の終了後には、今年度のライブラリアンシップ賞または優秀賞を受賞した 6 活動を除いた残りの 8 活動から、Library of the Year 2024 の協賛社からの推薦として協賛社特別賞を 1 活動、知的資源イニシアティブの Library of the Year 2024 実行委員会からの推薦として実行委員会特別賞を 1 活動、合計 2 活動を選出しました。従来の特賞は毎回の開催ごとに 1 活動のみに授与しておりましたが、今年度からは 2 種類の特別賞を設けることで、2 活動に対して授与することになりました。

■ライブラリアンシップ賞を受賞した活動とその授賞理由

長期的な活動を評価するライブラリアンシップ賞には、【千葉市図書館情報ネットワーク協議会】と【みなサーチ（国立国会図書館障害者用資料検索）とデータ提供館並びにデータ制作者の方々】の 2 活動が選ばれました。

【千葉市図書館情報ネットワーク協議会】は、授賞理由に「30年にわたる館種を超えた図書館ネットワークの構築と発展」とあるように、市内の公共図書館、大学図書館、専門図書館によって構成されるユニークな地域図書館ネットワークが評価されました。受賞スピーチのなかで、「人的ネットワーク／業務的ネットワークを基盤とした利用者サービスを提供すること」をもっとも重要視しているとの話をされていたことが印象的でした。こうした取り組みが各地に広がっていくことを期待しています。

また、【みなサーチ（国立国会図書館障害者用資料検索）とデータ提供館並びにデータ制作者の方々】については、授賞理由に「障害の当事者・支援者らの参画による障害者用資料検

索の実現」とあるように、全国の図書館やボランティア団体などが提供する障害者用資料データを集約し、インターネット上で利用できるようにする取り組みが評価されました。受賞スピーチのなかでも言及されておりましたが、視覚障害者等用データの収集や送信サービスはもともと2014年に開始されたものであり、「みなサーチ」の正式版公開が公開された今日では、150を超える提供館から約4万件のデータを揃えるまでに発展しています。全国各地のデータ提供館と力を合わせながら、これまでの10年間のあゆみをさらに前へと進めていただけたらと思います。

■優秀賞を受賞した活動

優秀賞を受賞したのは、【泉大津市立図書館 シープラ】【沖縄県立図書館 “Finding Okinawan Roots” Project】【国立がん研究センター「つくるを支える 届けるを贈る『がん情報ギフト』プロジェクト】【真庭市立図書館】の4活動となりました。これら4活動についての講評は、最終選考会の記録と併せて後述します。

■特別賞を受賞した活動とその授賞理由

ライブラリアンシップ賞や優秀賞を受賞した6活動以外で、第二次選考会での議論の対象となっていた残りの8活動を対象として、Library of the Year 2024 実行委員会によって特別賞の授与を検討しました。昨年度までは特別賞として1活動のみを選んでおりましたが、今年度からは協賛社の投票によって選ぶ1活動（協賛社特別賞）と、実行委員会の合議によって選ぶ1活動（実行委員会特別賞）とを設けることとして、合計2活動を選出することにしました。今年度のLibrary of the Year 2024 協賛社特別賞には協賛社のうちの3社から票を投じられた【皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部】が選出され、さらにその後第二次選考会であともう一步票が届かなかった【埼玉県立飯能高等学校図書館（すみっコ図書館）】をLibrary of the Year 実行委員会特別賞として選出しました。

【皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部】は、授賞理由に「地域社会と大学図書館とをつなげる開かれた学生協働活動」とあるように、学生協働の取り組みを大学図書館のみに閉じないという活動のあり方が評価されました。昨今の文部科学省の施策にも見られるように、大学が地域社会と連携する拠点となり、地方活性化を担う役割を期待されている時代において、大学図書館の学生協働団体が地域とつながることを意識し、積極的に活動を展開する姿勢には、学生協働というムーブメントのひとつの到達点が見えたように思います。

【埼玉県立飯能高等学校図書館（すみっコ図書館）】は、授賞理由に「どんな生徒も必ず居場所が見つかる学校図書館の運営と公開」とあるように、特に「居場所」というキーワードを強調している姿勢が高く評価されました。過去のLibrary of the Yearでも何度か名前が上がっており、これまでもその評判の高さは業界内に知られておりました。生徒が学校図書館にアクセスしやすい状況をいかに作り出すのかというさまざまな工夫は、他校の運営においても参考になるところが多いと思います。

■最終選考会の審査員の確定

今年度の Library of the Year 2024 最終選考会は、昨年同様にパシフィコ横浜に関係者と聴衆が集まったの対面開催となりました。登壇者や運営関係者も含め、約 120 名の方々が会場に集まりました。

最終選考会の審査員を担当する 5 名については、Library of the Year 2024 実行委員会にて人選を行っています。今年度の人選についても、「多様な分野から選ぶ」「世代間のバランスを考慮する」「ジェンダーバランスを考慮する」「少なくとも 1 名はライブラリアンを含める」という方針のもとに依頼をしました。お願いするにあたっては候補者のスケジュールも考慮しなければならないため、実際に審査員を打診してみないことには顔ぶれを確定しづらいものとなります。今年度も何名かの候補者にはスケジュールの都合でお断りをされており、審査員 5 名を揃えることの難しさを痛感します。特に最終選考会の会場をご提供いただいている図書館総合展というイベントは、同時進行で実施されるほかのフォーラムの時間帯と被ってしまうことも多いため、パシフィコ横浜にはお越しになっているけれども別フォーラムとの兼ね合いでご辞退せざるをえなかった候補者もいらっしゃいました。

それぞれに予定を調整していただいた結果として、今年度の審査員 5 名は次の顔ぶれとなりました。駿河台大学の青野正太さんには現場経験のある若手の図書館情報学研究者の立場から、株式会社ピクニックルームの後藤清子さんには子育てやまちづくりの立場から、新潟大学の高橋菜奈子さんには大学図書館・学校図書館とデジタル技術の活用の立場から、横浜市議員の藤崎浩太郎さんには現職の議員としての立場から、伊勢市教育委員会の宮澤優子さんには学校図書館の立場からのコメントを期待し、審査員のお役目をお願いしました。

■最終選考会における審査員への問いと評価の観点

5 名の審査員のみなさまには、事前に「自らの審査のポイント／評価基準はどのようなものか」「その基準を今回の優秀賞受賞活動に照らし合わせた場合、どのような良い点やおもしろいと思える特徴が見えたのか」を言語化していただくようお願いしました。Library of the Year という賞は、「良い図書館を良いと言う」という選考プロセスをさまざまな立場の人たちによって積み重ねていく過程を重要視しています。選考委員会がまとめた授賞理由は最終選考会に先立って公開済みになっておりますが、最終選考会の審査員 5 名のみなさまにも改めてそれぞれの立場からの「良い」と思える点の言語化をお願いすることになります。

今年度の審査員のみなさまも、こちらの期待していた以上にそれぞれの立場から表現していただくことができたのではないかと思います。以下に 5 名の審査員が語ってくださった「審査のポイント／評価基準」の要点を示します。

●青野正太さん

ほかの多くの図書館やステークホルダーに対する波及効果があるかどうか。今回の受賞の効果を広報として活かしていく意欲があるかどうか。

●後藤清子さん

実践者でもある一市民として、その活動とともに一緒に未来を考えていきたいと思えるかどうか。子育て支援を活かして別の領域の方と越境できるかどうか。

●高橋菜奈子さん

未来を切り開くために、無理だと思えそうなことに取り組もうとするチャレンジ性があるかどうか。新しいものに広がりを持たせるためのオープン性があるかどうか。

●藤崎浩太郎さん

市民が抱えている地域社会のさまざまな課題に対して、どういった視点でそれらに応えようとしているのか。

●宮澤優子さん

何を、誰を、いつを見ているのか。その何かをするための戦略をどのように立てているのか。そこで生み出されたものは何か。これから先のことが見えているか。

以上の評価基準にしたがい、優秀賞4活動に点数をつけていただきました。過去2年間と同様に、今年度の最終選考会においても「審査員全員がすべての優秀賞受賞活動に順位をつける」(1位活動に4点、2位活動に3点、3位活動に2点、4位活動に1点)という審査方法となります。5名の審査員がつけた点数を合計した結果で評価することになるため、最高得点が20点、最低得点が5点ということになります。大賞に選ばれるためには、5名の審査員のうちの過半数となる3名以上から1位票の4点を獲得することが求められます。

■最終選考会における審査員評価の結果

このような基準で得点を集計してみたところ、大賞となる活動は合計16点を獲得した【沖縄県立図書館“Finding Okinawan Roots” Project】に決定しました。獲得した16点の内訳を公表しますと、【4点・4点・4点・3点・1点】となります。過半数に達する3名の審査員から1位票の4点を獲得しており、納得できる結果になっていると思います。とはいえ、そのなかには4位票の1点を入れた審査員も1名含まれておりますので、大賞を受賞する活動が満場一致で高い評価を獲得するのはなかなか難しいようです。最終選考会の審査を行うに際して、審査員5名の専門分野、世代、ジェンダーバランスなどに多様性を持たせることは、やはり大事なポイントであると感じます。

参考までにほかの3活動の得点についても公表します。昨年同様に、2位以下については活動名と一致しないように、それぞれをA活動、B活動、C活動と表記します。これは「優秀賞を取った時点で4活動すべてが素晴らしい活動をしている」ことを強調したためであり、大賞受賞活動のみが突出した印象になってしまうことを避けたいためです。最終選考会は優秀賞4活動に順位をつけることが目的ではありません。便宜的に点数をつけて大賞を選びましたが、その結果は活動に優劣が見られたというわけではなく、「優秀賞4活動の取り組みに差があるわけではない」というのが私たち主催者側の見解であるためです。

A 活動：12 点 内訳は【4 点・3 点・3 点・1 点・1 点】

B 活動：11 点 内訳は【4 点・3 点・2 点・1 点・1 点】

C 活動：11 点 内訳は【3 点・2 点・2 点・2 点・2 点】

2 位の A 活動は 12 点を獲得しました。大賞を受賞した【沖縄県立図書館“Finding Okinawan Roots” Project】とは 4 点差となります。1 位票も 1 票入っていますが、そのほかは 2 位票と 4 位票が集まる形になりましたので、このあたりで大賞の【沖縄県立図書館“Finding Okinawan Roots” Project】との得点の差がついた形になります。また、B 活動と C 活動はともに 11 点の同率 3 位となりました。いずれも 2 位の A 活動とは 1 点差でしたが、それぞれに内訳が異なっておりました。B 活動には 1 位票も入りつつも 4 位票も投じられておりましたが、C 活動には 4 位票がまったく入らないという結果になりました。

舞台裏で投票用紙にご記入していただく際には、審査員のみなさまはそれぞれに悩まれながら点数をつけているご様子でしたが、今回の結果は前述した 5 名の審査員の顔ぶれが揃い、そしてあの日あの時点で判断された結果がこのような並びになったということにすぎません。毎年の Library of the Year では、大賞受賞活動を選ぶために便宜的に点数をつけていただいておりますが、4 活動ともにすばらしい活動をしていた事実は揺らぐことはありません。大賞という称号は「優秀賞の 4 活動のなかからあえて 1 活動を選ぶならどれになるのか」という趣旨のものであり、表彰された活動はいずれも今年の Library of the Year 2024 を代表する活動ばかりだと言えるでしょう。

なお、今年度は 1 位から 4 位までの得点差が 5 点以内に収まっておりますが、これは現行の方式としてからもっとも差が小さい結果となっておりますので、それだけいずれの活動もすばらしく、魅力ある取り組みを継続されているということかと思われまます。

■優秀賞を受賞した活動の授賞理由

優秀賞を受賞した【泉大津市立図書館 シープラ】は、授賞理由として「市民の当事者意識や図書館に対する信頼感の醸成につながる活動」が強調されました。プレゼンでは、シープラの開館によって地域の価値が上がり、市民の意識にも変化が見られたことが強調されました。「聞く情報」にあふれるオープンセミナースペースや、来館者が傍聴・参加しやすくなる「聞きに行きたくなる図書館協議会」の設置などの取り組みが紹介されました。こども基本法に基づく「こどもとともに大人が実行するための計画」を策定し、こどもたちからもパブコメが寄せられるなど、市民にも計画にかかわってもらおうとする姿勢を強く感じました。

同じく優秀賞の【国立がん研究センター「つくるを支える 届けるを贈る『がん情報ギフト』プロジェクト】は、授賞理由のとおり「公共図書館を窓口にした「確かながん情報」へのアクセス保障」という点が評価されました。プレゼンでは、これまで信頼できるがん情報が届きづらかった人たちにもアプローチするために、市民生活の身近にある図書館という場で日頃からがん情報に接する環境をつくっていることが紹介されました。情報をつくる部分と情

報を届ける部分を組み合わせるための工夫のほか、図書館展示キットの巡回や近隣のがん相談支援センターとの連携など、あらゆる方法でがん情報を届けようとする姿勢は見事でした。

もう一つの優秀賞は【真庭市立図書館】となりました。授賞理由の「真庭市図書館みらい計画」に沿ったまちぐるみの図書館活動」にもあるように、プレゼンのなかでさまざまな取り組みが紹介されました。2021年に策定された「図書館みらい計画」は五つの柱から構成されており、「市民や団体の地域自治の拠点」となる役割を果たすことが目指されています。プレゼンのなかでも動画を用いて紹介されていましたが、閉校・休校を含む市内小中学校の校歌を収集する「真庭校歌研究室」のプロジェクトは特筆すべきものでしょう。市民が本や音楽を並べて語り合う取り組みなど、同館が大事にしている「もちより」という言葉には同館の活動理念が表現されています。

そして今年度のオーディエンス賞と大賞をダブル受賞したのは、【沖縄県立図書館 “Finding Okinawan Roots” Project】となりました。授賞理由にあるように、「移民ルーツ調査から始まる国境と世代を超えたコミュニティの形成」という点が高く評価されました。プレゼンの冒頭で家族のルーツ調査が世界的にも重要視されていることに言及した上で、2016年にハワイ在住の日系人の方からのレファレンスがきっかけとなって移民ルーツ調査が始まったことが紹介されました。2018年からは沖縄県の振興計画や沖縄県立図書館の運営方針にも盛り込まれるなど、新規事業として正式に位置づけられるようになったそうです。そのほかにも沖縄県移民渡航記録データベースの作成、移民資料収集や企画展示の実施なども紹介されました。図書館は地域と海外の日系人コミュニティとをつなぐ役割を担えるという強いメッセージは、この活動が沖縄県以外の都道府県にも広がっていく可能性を感じました。プレゼンの途中に挿入された利用者（沖縄3世の日系ブラジル人）のインタビュー映像は、審査員やオーディエンスのみなさまの心を打ったと思います。改めて大賞とオーディエンス賞の獲得おめでとうございます。

■最終選考会におけるオーディエンス賞の結果

会場投票によって実施したオーディエンス賞の票数の内訳もご報告します。有効票数は75票で、【沖縄県立図書館 “Finding Okinawan Roots” Project】はそのうちの24票（得票率32%）を獲得しました。そのほかは、A活動が15票（同20%）、B活動が17票（同23%）、C活動が19票（同25%）となります（前述した大賞の報告と同様に、2位以下の活動名は同じ記号に置き換えます）。

オーディエンス賞の結果は1位の【沖縄県立図書館 “Finding Okinawan Roots” Project】から4位のA活動まで、わずかに9票差のなかに収まっておりました。どこかに票が偏ってしまうことなく、4機関とも20%を超える得票率を獲得するような接戦でしたので、オーディエンスからの評価もどこかの活動が抜きん出ているというよりも、どの活動も同じくらいに高く評価されたということでしょう。結果としては【沖縄県立図書館 “Finding Okinawan Roots” Project】が頭ひとつ抜け出した形になりましたが、当日のオーディエンスの顔ぶれ

が異なればおそらく結果は変わっていたとも思われます。

■特別賞授与の経緯

最後に、今回の協賛社特別賞の経緯についての補足説明をします。

Library of the Year 2024 の選考委員長である岡野は、【皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部】とは利害関係がある立場にいるため、第一次選考会と第二次選考会における議論には不参加としており、投票の際にも棄権していることを申し添えます。これは昨年度の Library of the Year 2023 において、『ライブラリー・リソース・ガイド (LRG)』の優秀賞受賞が決定する過程で、利害関係者であるアカデミック・リソース・ガイド株式会社の岡本真さんが議論への不参加と投票時の棄権という対応をした前例に倣っています。選考委員の立場と利害関係のある候補活動の評価はしづらいため、選考過程で「議論にも投票にも関与しない」という対応を取ることで、ほかの選考委員と協賛社のみなさまに評価をお任せしています。あくまでも Library of the Year の選考過程の全体を調整・進行する役目でしかない選考委員長としての立場とは切り分ける形で、協賛社特別賞という結果についてそのまま受諾するという対応を取っております。

Library of the Year の選考結果は、開催年ごとの選考委員による議論を積み重ねて到達したものです。仮に「選考委員の立場にある」という理由を根拠として受賞辞退という対応をしてしまうと、Library of the Year という賞そのものの価値を毀損してしまうことにもなりかねません（「受けるに値しない賞」というこちらの意図とは異なるメッセージとして認識されてしまうおそれがあるためです）。私以外の選考委員と協賛社のみなさまによって選ばれた結果を尊重し、選考委員長としてその結果を見届けることとしました。

Library of the Year の選考過程は、実行委員会のメンバーで毎年議論を重ねて慎重に設計しており、個人の力で（自分ひとりの意見だけで）特定の活動を受賞させることができない仕組みをつくっています。これはたとえ利害関係のある活動が推薦されたとしても、それに関して選考委員が個人の考えで受賞を辞退するという判断を下すことも適切ではないということでもあります。選考委員の人数を毎年のように増やしているのも、多様な意見を取り入れつつ、投票時の「一票の重み」の問題を少しずつ解消する方向に進める意図があります。【皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部】が候補活動として推薦されたことも、協賛社特別賞をいただくことになった経緯も、選考委員長である私個人の力の及ばないところでの動きがあったことの結果となります。

■謝辞

2024年6月から11月までの約5か月間にわたって実施してきた今年度の Library of the Year 2024 は、2024年11月7日（木）の最終選考会の開催をもって無事に終えることができました。すべての関係者を代表して、関わってくださったみなさまには改めてお礼を申し上げます。

公式ウェブサイトの応募フォームから推薦活動の情報をお寄せいただいた全国各地のみなさま、ありがとうございました。本事業は「良い図書館を良いと言う」ための取り組みですが、何よりもまず選ぶ対象となる候補活動が推薦されてこないことには始めることができません。選考委員による推薦活動もごさいますが、一般公募によってその存在を知る活動も多く、さまざまな取り組みについて学ばされることが多いです。

第一次選考会と第二次選考会において議論を尽くしてくださった19名の選考委員のみなさま、ありがとうございました。ほかの選考委員の方々の意見を真摯に受け止めながら、その上で自分の評価や判断の言葉をさらに積み重ねていただきました。候補活動に対するそれぞれの思いが込められた言葉が飛び交い、選考委員会としての議論を深めていく過程はとても刺激的でした。また、授賞活動を決定してからも、短期間のうちに授賞理由のご執筆もいただいたことに感謝申し上げます。

最終選考会へのご登壇を快くお引き受けくださった5名の審査員のみなさま、ありがとうございました。最終選考会は毎年のLibrary of the Yearのなかでもっとも注目が集まる時間になります。審査にあたっての事前準備のご負担も大きいと思いますし、審査員として発する言葉の一つひとつに責任を感じてしまう役回りかと思えます。優秀賞を受賞した4活動のどこが「良い」のか、審査員として何を「良い」と思ったのか、責任感をともなった鋭く暖かい言葉を最終選考会の会場で披露していただいたことで、次の時代の図書館のあり方に参考となる考え方へと導かれたと思えます。

最終選考会でプレゼンをしてくださった各受賞活動のみなさま、ありがとうございました。Library of the Yearは知的資源イニシアティブ(IRI)が一方向的に授与している賞ではありませんが、各受賞活動のみなさまが快く賞を受け取っていただき、受賞コメントのなかで喜びの声をお聞かせいただけることは何よりの励みになります。既にさまざまなメディアで今年度の結果が報道されておりますが、今回の受賞によってそれぞれの突き抜けた活動がさらに注目されるようになることを祈念しております。

本事業の協賛社である株式会社内田洋行、株式会社カルチャー・ジャパン、キハラ株式会社、株式会社寿限無、富士通Japan株式会社の5企業のみなさまには、それぞれに賛助金のご提供、オリジナルの木製トロフィーの製作・提供、副賞となるブックトラックのご提供、運営事務局のご担当、最終選考会の会場提供など、さまざまな形でLibrary of the Yearへのご協力をいただきました。各社・各活動のみなさまには、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。Library of the Yearの仕組みを突き動かしているのは「他の図書館等の参考となる先進的な取り組み」を言語化しようとする思いによるものですが、運営を資金面から支えてくださるみなさまのお力添えがあってこそ、このようなイベントとして成り立たせることができている。また、ウェブやメルマガでのイベント告知にご協力いただいた図書館総合展運営委員会のみなさまもありがとうございました。毎年のように安定した形でLibrary of the Yearが実施できているのは、図書館総合展のフォーラムの一つに加えていただけていることが大きいと思いと改めて感じております。

そして、最終選考会の会場に足を運んでくださった多くの参加者のみなさまもありがとうございました。会場での各受賞活動のプレゼンや審査員討論会をご観覧いただき、オーディエンス賞の選考にご投票をお願いすることも Library of the Year 2024 最終選考会の重要な過程となります。ご来場してそれぞれの価値観で1票を投じてくださったみなさまのおかげで、最終選考会の結果がさらに盛り上がったと思います。

今年度もさまざまな人たちのお力添えをお借りしたことで、Library of the Year 2024 を無事に終えることができました。この場をお借りして、改めてみなさまに感謝の言葉を申し上げます。

■次年度の開催に向けて

来年度は、節目の20回目となる Library of the Year 2025 を開催する予定です。また、2015年に10周年イベントを実施したときと同様に、20周年イベントの開催を予定しております。次の時代の「良い」と評価される活動が何になるのかは現時点ではまだわかりませんが、Library of the Year の掲げている「良い図書館を良いと言う」の理念にもとづきながら、みなさまとともにまた新たな活動に注目し、次の時代のすばらしい取り組みを表彰したいと思います。引き続き当事業に対してご協力・ご支援をいただければ幸いです。

以上

受賞活動コメント

【Library of the Year 2024 ライブラリアンシップ賞】

■千葉県図書館情報ネットワーク協議会

この度は、Library of the Year 2024 ライブラリアンシップ賞にご選出いただき、まことにありがとうございます。授賞理由としていただいた「30年にわたる館種を超えた図書館ネットワークの構築と発展」は、まさに当協議会の活動が表されており、そこをご評価いただいたことは加盟館一同の喜びと言えます。

1994年に設立された当協議会は、設立当時より千葉市立の公共図書館、同市内の大学図書館や専門図書館が加盟する、館種を超えた協議会です。当時はインターネットも普及しておらず、図書館の蔵書検索も冊子やカードの目録が多かったため、協議会によって市内の図書館をつなぐことで相互協力や資料の物流の構築を大きな目的としていました。その後、蔵書検索のWeb上で検索できるOPACが一般化し、物流の基盤も整備されるようになりました。

一方、加盟館の職員の人的交流や業務のスキルアップはその重要性を増し、図書館業務の委託などの社会状況の変化やコロナ禍を経てますます大きな位置を占めるようになっていきます。このような、加盟館やそこで働く職員をつなぐことによる図書館サービスの向上は設立当初からも強く意識されており、「ネットワーク」という言葉が協議会の名称に冠された所以でもあります。そして、様々な館種の図書館が加盟していることで新たな気づきにもつながるなど、現在もその意義が引き継がれていることが強く感じられます。

現在、主な活動として、秋に開催する加盟館紹介展では加盟館の所蔵資料・活動・利用方法をパネル展示して市民の皆様にご紹介しています。また、加盟館の職員向けの研修会を年2回実施してスキルアップや最新情報の入手を進めるとともに、内容によっては一般の方にもご参加いただける講演会ともしています。あわせて、年度末に会報「ネットワーク通信」を発行し、市民の皆様への広報も行っています。このような活動や会報のバックナンバーは、協議会のWebサイト (<http://ccal.jp/>) にて公開しておりますのでご覧ください。

今回の受賞をきっかけに、館種を超えた図書館の集まりは極めて珍しい存在であることを改めて認識することができました。他の自治体や地域等でのご参考になれば嬉しいですし、新しいネットワークにつながることを願っております。この度は誠にありがとうございました。

千葉県図書館情報ネットワーク協議会

【Library of the Year 2024 ライブラリアンシップ賞】

■みなサーチ(国立国会図書館障害者用資料検索)とデータ提供館並びにデータ制作者の方々
この度は、Library of the Year 2024 のライブラリアンシップ賞に「みなサーチ(国立国会図書館障害者用資料検索)とデータ提供館並びにデータ制作者の方々」をご選定いただきましたことにつき、受賞対象に含まれるすべての皆さまに代わりまして、御礼申し上げます。

国立国会図書館は、2024年1月に「みなサーチ」という新たな障害者用資料検索サービスを公開いたしました。みなサーチでは、当館が製作した視覚障害者等用データに加え、公共図書館、大学図書館、学校図書館、ボランティア団体など、全国のデータ提供館が製作し当館にご提供いただいたデータを一体的に検索・利用することができます。このように、全国の皆さまが製作した視覚障害者等用データをインターネット経由で利用できるサービスは、2014年から始まりました。この10年間で、150を超える全国のデータ提供館から、4万件以上の視覚障害者等用データをご提供いただいております。

膨大なデータを集積できた背景には、さまざまな館種のデータ提供館の皆さまと、全国各地でデータ製作に長年ご協力いただいた多くの方々のご尽力があります。皆さまのご支援とご協力があったこそ、当館はここまで事業を進めることができました。本来であれば、すべてのデータ提供館の皆さまをご紹介申し上げるべきところではございますが、以下の当館ホームページにてご覧いただけますようお願い申し上げます。この場をお借りして、皆さまの長年にわたるご尽力に心より敬意を表し、深く感謝申し上げます。

国立国会図書館ホームページ「各サービスの承認館・参加館一覧」

https://www.ndl.go.jp/jp/library/supportvisual/supportvisual_partic_1.html

今回の受賞を契機に、当館は関係者の皆さまとさらに連携を深め、みなサーチを窓口として視覚障害者等用データを共有する体制を一層推進して参ります。

本事業が読書バリアフリーの実現に向けて、多くの方々のお役に立つことを心から願っております。どうぞ今後ともご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

国立国会図書館

【Library of the Year 2024 優秀賞、大賞、オーディエンス賞】

■沖縄県立図書館 “Finding Okinawan Roots” Project

このたびは、Library of the Year 2024 において大賞およびオーディエンス賞を賜り、誠にありがとうございます。長年にわたりこの取り組みを継続されている主催者及び関係者の皆様、審査員の皆様、ご来場いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

沖縄県立図書館では、2016年から本格的に、沖縄から海外へ渡った移民の子孫にルーツを探すレファレンスサービスを始めました。その後、手探りで一步步取り組みを進めながら、現在はこのレファレンスをはじめ、国内外の資料収集、企画展示や講演会など、沖縄移民に焦点を当てた事業に取り組んでいます。

さて、この取り組みを可能としているのは、館種を超え、図書館の重要な取り組みの一つである地域資料の収集・保存・登録、そして利活用する活動です。さらに、地域資料を生み出している研究者、出版社などの長年にわたる尽力の成果でもあります。そして、地域の情報拠点である図書館が、敬意と誇りをもち、それらの資料や情報を必要とする方々（海外の沖縄移民の子孫等）へ届けてきたことで、国際交流の情報拠点としての役割も果たしてきました。今回の受賞は、この取り組みを高く評価していただいたと考えています。

この事業の実施にあたり、県内の大学、県史・市町村史編纂部門、市町村、公民館、教育委員会、国際交流部署をはじめ、国内外の図書館、文書館、博物館、資料館、研究者、県人会及び県系人等の継続的な温かいご支援、ご協力に心より感謝し、またこの喜びを分かち合いたいと思います。

海外には、沖縄県系人が42万人、日系人は500万人にいられています。多くの図書館が、日系人の情報ニーズに目を向け、新たな図書館の価値を生み出していくことを期待しています。

当館は、今後も地域を支え、海外の交流促進を図る知の拠点として、職員一同活動していきたいと思っています。

最後になりましたが、Library of the Year の益々のご発展をお祈り申し上げます。

沖縄県立図書館 一同

【Library of the Year 2024 優秀賞】

■泉大津市立図書館 シープラ

Library of the Year 2024 優秀賞を賜り、誠にありがとうございます。市民とともに図書館シープラの形を作って3年。選考委員、審査員の皆さまに当館の活動を評価いただきましたことを、市民とともに心から感謝申し上げます。

「図書館はわたしたちを信頼してくれてるんですね」と中学生に声をかけられたことがありました。「〇〇をしてはいけないをなるべく言わない図書館」という図書館の姿勢を信頼と受け取ってくれたのです。今回の授賞理由となった取り組みである「オープンな場で開催される図書館協議会」と「こども基本法に基づきこどもの意見を反映した読書活動推進計画」は、3,500㎡ワンフロアの中心にあるオープンセミナースペースから生まれ、過程のすべてを市民と共有しています。理由コメントで、そのスタイルは図書館への信頼感になるとおっしゃっていただきましたが、図書館も市民を信頼しているからこそ、来館する方にとって自由度の高い図書館運営ができております。ご協力いただいている図書館協議会委員の皆さま、「キミと、よみドキッ！（泉大津市こどもの読書活動推進計画）」に携わったこどもたち、これらの活動を後押ししてくださっているすべての皆さまに感謝をお伝えしたいと思います。

図書館は、市政をわかりやすく市民につたえる場所であり、すべてのひとに関係する施設です。泉大津市立図書館は、これまで生活の中に図書館利用がなかった方、図書館を必要とできなかった方に届く活動にチャレンジし続け、市民が心も身体も健やかに過ごせるよう努めてまいります。

最後になりましたが、Library of the Year の益々のご発展をお祈りするとともに、すべての図書館関係者が市民とともにそれぞれの思い描く活動を自信をもって笑顔で進めていけることを願います。

本当にありがとうございました。

泉大津市立図書館 一同

【Library of the Year 2024 優秀賞】

■国立がん研究センター「つくるを支える 届けるを贈る『がん情報ギフト』」プロジェクト

この度は「Library of the Year 2024 優秀賞」をいただき、心より感謝申し上げます。

国立がん研究センター「つくるを支える 届けるを贈る『がん情報ギフト』」プロジェクトは、市民・企業の皆様からのご寄付、助成金と、公共図書館の皆様のご協力を得て、ウェブサイト「がん情報サービス」の科学的根拠に基づいた「確かな」「わかりやすい」「役に立つ」がんの情報を国民のみなさまに提供すること、そしてがんの情報を手に取りやすい冊子の形で全国の図書館へ寄贈することを支えるもので、全国にある約3,300館の公共図書館のうち、711館に「がん情報ギフト」コーナーが設置されるまでに育ちました。

病気の診断、治療を行う医療機関での情報提供はもちろん必須ですが、病気を告げられて動揺したときに冷静に受け止められるとは限りません。インターネットが身近になり、手軽に情報を得られるようになりましたが、科学的に根拠に基づかないものを含む玉石混淆の状況であり、不確かな情報に翻弄される場合もあります。そんなときに、情報を扱うプロフェッショナルである図書館員の皆様と協力しながら、がん・医療の情報発信をすることで、図書館が、がんの情報が必要になったときに頼れる情報拠点となり、国民ががんになってもあわてず、必要な情報を得て、自分らしく生活できる社会を実現することにつながると考えております。

この度、医療分野の専門機関である国立がん研究センターが行うプロジェクトがこのような賞をいただいたことは、弊プロジェクトだけでなく、数多くの機関が担当している、医療分野の情報発信の取り組みに対して、心強い応援をいただいたと感じています。必要なときに、一人でも多くの人に活用してもらえよう、多くの方に知っていただき、ご賛同のもとご支援をいただきながら永く続けていきたいと考えております。

図書館関係者の皆様には、引き続きご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

国立がん研究センターがん対策研究所
がん情報ギフトプロジェクト事務局

【Library of the Year 2024 優秀賞】

■真庭市立図書館

Library of the Year 2024 に関わるすべてのみなさまおつかれさまでした。そして、わたしたちの取り組みに着目していただきありがとうございます。ありがとうございました。

真庭市の7つの図書館は、2005年の町村合併で市立図書館として歩み始めました。2018年に中央図書館を設置し、2021年に「真庭市図書館みらい計画」（以下、みらい計画）を策定。各館が地域の特色を生かしつつ、真庭市立図書館としてまとまって運営していく基盤が整いました。

わたしたちは、地方の、人口減少が進むまちの図書館として、まずは今このまちに住む人たちがたのしく暮らしていけることを第一に考えています。大人も子どもも、一人ひとりが「このまちなら何かできる」「暮らしていける」と思えるように、と。ここで育つ子どもたちがそうした人たちの姿を見て、ここに住み続けよう、あるいは、いつでもまたここに戻ってくればいいんだ、と。そう思えるように挑戦を続けていきます。

今回、“市民と対話による「図書館そだて会議」で策定したみらい計画を土台に、「あそび」の生まれる時間を大事にしながら、「生き方」「考え方」「暮らし方」の学び合いを実践している”こと、そして、“図書館を拠点とした学びとつながりによって真庭市の一体感を醸成している”として、優秀賞をいただきました。ここで評価していただいた実践や、学び、つながりは、図書館だけでできたことではありません。どれも、図書館の取り組みをおもしろがってくれて、「それができるならこれもやってみようよ」と持ちかけてくれる市民・図書館利用者みなさんがいてくださってのことです。本当にありがとうございます。

これからも引き続きどうぞよろしく願いいたします。

真庭市立図書館 職員一同

【Library of the Year 2024 協賛社特別賞】

■皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部

このたびは、Library of the Year 2024 協賛社特別賞をいただき、誠にありがとうございます。私たちが積み上げてきた活動に注目し評価していただいたことを、関係者一同大変喜んでおります。またこの場をお借りして、協働の機会をくださった三重県内各図書館様、地域の皆様、企業様、出版者様、学生協働フェスタ in 東海サポートミーティングの皆様ほか、ふみくら倶楽部をご支援くださったすべての皆様に感謝申し上げます。

2016年2月に学生の熱意から始まったふみくら倶楽部は、すでに卒業した8世代40人を含む、12世代62人が9年間にわたり活動を続けてきました。この受賞は、現役学生だけではなく、ふみくら倶楽部で活動してきた卒業生にも大きなご褒美で、喜びとなりました。

大学生が自主的なグループ活動を継続するうえで一番重要かつ困難なことは、次世代への知識と経験の継承ではないでしょうか。

コロナ禍以前のふみくら倶楽部は、学内・学外の活動のノウハウや、活動から得る喜びを、学年を超えた交流のなかで伝えていました。しかし、コロナ禍は学年を超えた学生同士のコミュニケーションを難しくしました。その環境下でも、学外活動の運営ノウハウや活動から得られる喜びを次世代へ引き継ぐために、学内行事「空のブックリサイクル」の運営をするなど、形を変え工夫をしながら活動を継続してきました。特に評価をいただいた学外での活動が、順調に以前の活動サイクルに戻ることができたのも、その時々の学生たちの「下級生へ引き継ぐ」という強い気持ちがあったからだと感じています。

最後に、僭越ではございますが、今回の受賞が大学図書館を中心に活動するすべての学生の皆様、学生を支援する教職員の皆様へのエールとなりましたら大変ありがたいと存じます。

今日もふみくら倶楽部は元気に楽しく活動しています。引き続きのご支援ご鞭撻のほど、どうぞよろしく願いいたします。

ふみくら倶楽部 皇學館大学附属図書館 一同

【Library of the Year 2024 実行委員会特別賞】

■埼玉県立飯能高等学校（すみっこ図書館）

この度は、Library of the Year 2024 実行委員会特別賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。本受賞は、これまで注目される機会が少なかった学校図書館の取り組みに光を当てていただいた結果であり、推薦して下さった皆様、日頃から支えてくださる全ての関係者に心より感謝申し上げます。

すみっこ図書館は、「読書・学習・情報センター」の基本機能を充実させるだけでなく、生徒たちが安心して過ごせる「居場所」としての役割を重視し、日々運営を行っております。従来の学校図書館の常識を見直し、斬新なゾーニングや資料配置、さらには生徒たちの興味を引く仕掛けや工夫を取り入れることで、図書館がただの学びの場にとどまらず、楽しさや発見のある空間としての新しい可能性を追求してきました。こうした取り組みは、校内の生徒のみならず、外部からも注目され、多くの学校関係者や教育者の方々に見学や講演の依頼をいただくようになり、少しずつその成果を感じております。

また、高校という限られた年齢層を対象とする図書館である一方、多様な背景や課題を抱える生徒たちが集まる現実があります。私たちは、図書館が「本だけを提供する場」とどまらず、生徒一人ひとりの心に寄り添い、「目には見えないけれど大切な価値」を提供できる場であるべきだと考えています。従来はタブーとされてきた飲食やおしゃべりを受け入れる運営方針が、徐々に広まりつつあることに私たちは希望を見出しています。このたびの受賞は、「生徒の目線で」「学校運営に貢献する」という理念のもとに運営を続けてきた私たちの活動が、多くの方々に共感していただき、学校図書館の持つ可能性を評価していただいた結果ではないかと感じています。

本受賞を契機に、学校図書館に携わる皆様が元気と勇気を持ち、それぞれの図書館が持つ独自の魅力を外部に発信できるようになることを願っております。そして、学校図書館が生徒たちのためにより開かれた、自由で多様性を受け入れる場として進化し続けていくことを期待します。このたびの栄えある受賞に、改めて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

司書 湯川 康宏